

## 卯月を迎えて

## 分所長 高木 敏彦

4月に入り、百花繚乱の「とく」野花が咲き誇っています。「コロナの勢いもやっと失せ今月から月次祭後の直会を復活し、来月の分所の春の大祭を皆さんと盛大にお迎えしたいものです。」

さて、今月号は出口三千磨先生の追悼集「松韻帖」に載せられていた三代様の追悼文を2回に分けて掲載しますのでよろしくご拝読ください。

## 清純にして堂々の偉丈夫 ①

## 出口 直日

三千磨さんは、影のない、正々堂々とした性格の人でした。そういう明るくて、堂々としたところが、とりわけわたしは好きでした。けれども、三千磨さんを知る人が、そういうところを、どのように受けとめていたかは、一様ではなさそうです。人によつては、「三千磨は威張らせといたらよい」などと、いつていました。そんな分からず屋が、あの人をとりまく長老の中にもいました。性格がサッパリしていて少しも、てらいのない人でした。いつも高いところから平明にもものを見ることのできる人でした。そこから利己のない清い自分で積極的に行動していく人でした。

それが、かえって誤解をまねくというかなしさ、人間の世界には、いつまでも、つきまといっているようです。大本事件中も、警察や刑務所に勤めている人に、三千磨さんの澆らつとした性格が、逆に憎しみをかい、上手に立ち廻れないままひどい拷問をうけたことが記録されています。吉田松

陰が、江戸に護送された時、その任に当たった役人には松陰のいだいていた高い精神にふれることができず、ものの考え方や日頃の生活態度も違つたので、ひどい扱いをし、唐丸籠に共につれてゆかれた弟子の重助が憤るのへ、松陰は「怒つたつて仕方がない、あの人たちには判らないのだから」と諭していません。

三千磨さんにも、そのようなやさしい、深い思いやりがありました。それで三千磨さんは、人が他人の陰口をいうのを、ひどく嫌いました。わたしの妹たちは、世間の人からみると、のどかな人種で、人のことを、とやかくいわない方ですが、それでも時に、癪にさわつて、気持ちのおきどころのない目に会い、陰口でも、もらしている、三千磨さんは「そんなにいうのなら、なぜ、その人に会つて言つて上げないのか」と言います。尚江は「三千磨の前ではウツカリ人のことは、いわれない」とこぼしています。まことに三千磨さんの面目が躍如としています。三千磨さんは、陰でいわない代り、面と向つては、その人への好意をこめて、率直にいう人でした。歯切れの良い東京弁で闊達に話す人でした。ある人は、それを快く受け、ある人は叱られたかのようにおもしろい、そこで、慕う人と反感をもつ人がいたようです。人間というもの、自分がほめられると気持ちよく、お世辞とおもつていても、耳にこころよい言葉には、甘味をおぼえるものです。三千磨さんの言葉は、上方の風土には鋭くて、苦みをふくんでいたとしても、純情を丸出しにしたものだけに、夜半にしずかにもの思ふ時、無心になつて三千磨さんの言葉をよく噛みしめてみると、なにを言われたかが、誰にも分かるはずで、分からないというのは、もともと生き方が違うか、でなければ、なにかで心の眼をくもらせているからで、

いつまでも理解でき難いというのは、語るに足りません。

当時の大本の若い人々は、三千磨さんの私心のない男らしい叱つたを、むしろ、よろこびとし、三千磨さんのもとに集つたといひます。したがつて、あの人々の周辺には、世の常の面従腹背の姿は影をひそめていたようです。その意味では三千磨さんの短い生涯を、大本という精神的な世界でおわつたことは、不幸ではなかったのではないかとおもっています。(次号に続く)

## 主な行事予定

4月9日(日) 午後1時半より

碧南分所月次祭 担当第3班

4月16日(日) 午前10時より

三河本苑月次祭・直心会役員支部長会議

4月22日(土) 午前9時半より

誠心会万祥殿献勞

5月14日(日) 午前10時半より

碧南分所春季大祭祖霊合同慰霊祭

5月21日(日) 午前10時より

三河本苑春季大祭・祖霊慰霊大祭

## 4月の誕生者

おめでとつございます!

高木 敏彦 4日 生田 凱 9日 高木 春代 1日 奥谷 雛子 12日 榊原 洋子 14日 松村 隆範 16日 高橋 佳織 20日 奥谷 有美子 高橋 理子 24日 鈴木 正勝 25日 高橋 千紘 26日 神谷 章子 30日